修士論文（要旨）
2016 年 1 月

大学生の同性友人関係における健康的依存に関する研究

指導　山口　一　教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
214J4006
森　祐子

Master's Thesis（Abstract）
January 2016

A Study of Healthy Dependency in the Same-sex Friendships of University Students

Yuko Mori
214J4006
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J.F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目　　　　　次

第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第３章　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第４章　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第５章　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅰ

第１章　はじめに

かつて依存は自立の対極概念として挙げられることが多かったため，依存は否定的に捉えられていた。しかし，依存が問題になるのはそれが病的であることや，過度である場合だけであり，最近の研究では依存の適応的側面に注目したものが増えている。この場合，依存と自立は対となる概念ではなく，自立するためには，むしろいかに依存するかが大切であり，成熟した大人として依存性をもたないことのほうが問題であるとされている（藤中，1998)。また，関（1982）も依存性は，人に普遍的なもので発達に伴って消失するものでなく，より成熟したものに変容していくと述べている。つまり，成熟した人格にも依存性は存在し，人間が成熟した存在であるためには依存は不可欠とされている。また，畠山（2002）は，依存や甘えには癒しや情緒的な安定性をもたらす機能や，人とのつながりを維持する機能があるとしている。

このように見てくると，適応的な依存とは，主体性のある人間として，相手を尊重しながら，お互いに支え合い，助け合うことであり，相手と程よい間合いがあることであると考えられる（渡辺，2011)。

竹澤（2008）は依存性の適応的意義に注目した研究を行った。依存性が適応的に機能するために重要な要因は「相互依存性」,「依存状況においても自己決定や自律性を失わないこと」,「自分が依存することを受容すること」,「対象，場面，課題によって柔軟な依存が出来ること」の４つにまとめている。そして，信頼感が高いことも適応的依存に関連していることや不安は不適応な依存を高めることが先行研究から明らかとなっている。

以上のことから本研究では不適応な依存ではなく,適応的な依存に焦点をあて,さらに,青年期の対人関係において重要度の高い友人関係を軸に研究を行う。また，ここまで述べてきた適応的依存について，ここからは健康的依存と表す。

健康的依存は，関（1982）によれば，人格に内在化している，その存在を認めている，その存在に不安を感じない，自律性と相補的に存在している依存であるとする。また，川森（2012）は，健康的依存とは，成熟し，安定し，統合された人格に備わっているべき依存であり，また，相互依存的な，他者と良好な関係を保ち，かつ，そこから得た安心感を基礎として自立的になるために必要不可欠な依存であるとしている。以上の性質を持つ依存のことを本研究では健康的依存とする。

第２章　目的

本研究の目的は大学生の同性の友人関係における健康的依存について量的に研究し，健康的依存に関する要因や特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には以下の仮説を検証する。①女性は男性より「健康的依存」が高い傾向にある。②「自分への信頼」「他人への信頼感」が高い場合,「健康的依存」が高い傾向にある。一方,「不信」が低い場合,「健康的依存」が高い傾向にある。③「内的他者意識」が高い場合,「健康的依存」が高い傾向にある。④「私的自己意識」が高い場合,「健康的依存」が高い傾向にある。⑤「援助を受けることに対する肯定的態度」が高い場合,「健康的依存」が高い傾向にある。⑥「特性不安」が低い場合，「健康的依存」が高い傾向にある。

第３章　方法

調査は首都圏の私立大学に在籍する大学生 450 名に配布し，214 名からを回答が得られた（回収率 47.6%）。有効回答は 202 名（有効回答率は 94.4%，男性 85 名，女性 117 名，平均年齢 19.3 歳，SD＝1.26）であった。

質問紙の内容は①統合された依存尺度（関，1982）②信頼感尺度（天貝，1995）③内的他者意識尺度（辻，1993）④私的自己意識尺度（山田・齊藤，2011）⑤被援助行動に対する態度尺度　（高木・妹尾，2006）⑥特性不安尺度（清水・今栄，1981）の 6 尺度及びフェイス項目であった。

分析方法は，IBM SPSS Statistics 22 を用いて，尺度得点の性差を検討するために t 検定を行う。次に，男女別に相関係数を算出し，健康的依存と他の概念間の関連を検討する。さらに，健康的依存を目的変数，関連があると想定した特性不安を除く他の概念を説明変数とした場合に，他の概念が健康的依存に独自の説明力を持っているかどうかを検討するため，重回帰分析を行う。

第４章　結果

t 検定を行った結果，「健康的依存」の得点は，女性は男性より有意に高かった。

そのため，男女に分けて相関分析を行った結果，男性は「健康的依存」と「自分への信頼」「他人への信頼」との間に正の相関がみられた。一方，女性は「健康的依存」と「自分への信頼」「他人への信頼」「内的他者意識」「援助を受けることに対する肯定的態度」との間に正の相関がみられた。

また，「健康的依存」を目的変数とした重回帰分析では，男女ともに「他人への信頼」からの正の影響がみられ，女性においては「内的他者意識」からも正の影響がみられた。次に「他人への信頼」を目的変数とした重回帰分析の結果では男女ともに「自分への信頼」「内的他者意識」からの正の影響がみられ，「不信」からは負の影響がみられた。

第５章　考察

本研究の結果，相関分析と重回帰分析の比較から，「健康的依存」に直接関連する「他人への信頼」と，間接的に関連する「自分への信頼」「内的他者意識」「不信」とは分けて考えた方がよいと言えるだろう。間接的に関連する要因も重要であり，それらも「他人への信頼」を媒介して「健康的依存」に関連を持つと言えることから，その両者を含めたモデルを作成できたことは，「健康的依存」を理解する上で意味があると言えるだろう。

また，男女差について，まず，男性は女性よりも「健康的依存」が少ないことから，男性は依存を問題解決の行動としてあまり用いない可能性が考えられた。一方，女性は，「健康的依存」に対して「内的他者意識」が重要であるが，「内的他者意識」は「特性不安」とも正の相関がある。そこから，他者の行動や意図を気にして依存を抑制する可能性が考えられるため，依存の対象や内容に関する現実検討が必要と思われた。このように男女の違いを考慮し，「健康的依存」に関する研究をさらに行う必要があるだろう。

引用文献

天貝由美子（1995）. 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響　教育心理学研究, **43**,364-371.

藤中隆久（1998）. 高齢者の不安と依存性の特徴　九州大谷研究紀要, **24**, 120-136.

畠中宗一（2002）. 自立と甘えの社会学　世界思想社

川森美保（2012）. アタッチメントの側面から見た適応的な依存とは　立教大学大学院現代心理学研究科,　**6**,　19-29.

関　知恵子（1982）. 人格適応面からみた依存性の研究 自己像との関連において　京都大学臨床心理事例研究紀要, **9** , 230-249.

清水秀美・今栄国晴（1981）. STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成　教育心理学研究, **29**, 348-353.

高木　修・妹尾香織（2006）. 援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性 行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究　関西大学社会学部紀要, **38**, 25-38.

竹澤みどり（2008）. 自律的な依存の仕方が依存後の自己成長感に及ぼす影響について　筑波大学心理学研究,　**35**, 65-72.

辻　平治郎（1993）. 自己意識と他者意識　北大路書房

山田竜平・齊藤　勇（2011）. 現代の大学生における自己意識とセルフ・モニタリングの関連について 立正大学心理学研究年報, **2**, 39-45.

渡辺　登（2011）. 依存症のすべてがわかる本　講談社